童謡漫筆

ニコピン草（二）

仁古貧生

ニコピン草は、仁古貧草なり。某曰く「仁者古來貧也」。と、貧なるが故に尊とし。貧しきが故に、如何に小なる悦びも、幸福をもたらす。卽ち、この貧や、富など。而して、幼兒の伴侶たるものにのみ、此の謙讓の德豐かなれば、此の悦びと、此の幸福とは、與へらる。滿足すべく、感謝すべし。ニコニコピンピンなどゝ、いらざることを謂ふべきにあらず。唯恐る。この仁古貧草、あまりに雜草多くして、花咲くこと無からんかを。されば、冀はくは、精讀紙背に眼を透して、心の大野に、はた、胸の野路に、お好み好みの色に花は咲かせて、幼兒の言行の神祕と眞理とを愛でたまはらんことを。

一、三日月船

三日月は、昔から幼兒のもの、童謡ものになつてゐて、たくさんに、幼兒をよろこばせてくれますが、それを、畫にかゝせますと、上弦なのか、下弦なのか、明確でないのは、何うした事でせう。人間をかゝせれば、首からすぐ腕が出て、足も出る。しかし、手の指は、明かに五本かくほごの正確さはありますに、何故、月の中でも、三日月ばかりが、上弦なのか、下弦なのか、明確に、幼兒の心のカメラに印象されてゐないのでせう。

さういへば、これは、幼兒ばかりではありません、私の關係のある女學校の上級生に月のレンズがあつて、

「一體三日月は☽の形でしたかね、それとも☾の形でしたかね」。

と尋ねましたところ、

「あら、ほんと。どちらが三日月樣でせう」。

「上が缺けてゐるんでせう」。

「あら、下が缺けてゐるんでせう」。

「ほんとに、どちらでせう」。

「あら、いやだ」

と、自らに失望して、

「先生、どちらですか。三日月さまは—」と問はれて、先生も、數年前までは、

「先生も、少し怪しいから、皆さんに、おきゝしてゐるんです。

皆さんは、コドモではないけれど、大ごもではない。大ごもは、こかく鈍感で困るが少くとも、中ごもだから、大ごもの私達よりは、敏感でせう、それで、上弦の月が三日月樣なのか、下弦の方がそれなのか、中ごもさん達は、明確に知つてゐさうなものではありませんか」。

と、苦しい回答をして、再び、皆の間に

「あら、ほんとに、どちらでせう」。

「上が缺けてゐるんでせう」。

「下の方でせう」。

と、反復して考へさせたことでしたが、先年外國から歸つた友人の御土産の本の美しい插畫を見てゐますと、三日月を船にして、可愛いゝ少女が、乘つてゐるのがあり、童話にも、月の船がある事を思ひあたり、私も「三日月船」を思ひつきました。それは、數年前の事ですが、やつと、此の夏、新那須溫泉で、幾つかの校歌を作りえて、安心して歸京する汽車の中で、「三日月船」の短かい童謠を作りえました。これは、まだ完全でありませんので、お目にかけかねますが、私が、綴方だけ擔任してゐる尋常小學三年生に出た時、女學校上級生へと同じ樣に、きいてみましたところ、低學年は、意外に多いが、日ごろ、夕空に仰いで見て、印象づけられてゐるところも、明確だと見えまして、正しく答へるのでしたから、大にほめて、

「ギッチラコ〳〵と漕いで行く中にすつと、波の上に乘り上げた樣に、右の方が、すこし高く上つてゐるんですね。三日月さんのお船は」

と、いふと、

「さうです。三日月船です」「三日月船です」

と、口々に叫んで、大悅なのです。

そこで、

「三日月船は、どこの海を漕いでゐるんでせう」

ときくと、言下に、

「空の海を漕いでゐるんです」。

といふお子さんが二三人。

「うまい！空の海です。さうです、三日月船は空の海を漕いでるんですね。

それで、空の海は、何んな色をしてるますかしら」。

「ハイ」「ハイ」「ハイ〳〵」。

と盛んに手が上つて。

「青い色です」。

「海とおなじで、青い色です」。

と重ねていふお子さんがあります。そこで、私は、

○いね、

□いね、

空は □ね

□をこいでる

三日月船ね

と板書して、○、□、□に漢字一字づゝを入れる事を求めましたところ、○は、すぐ「青」ときまりましたが、次の□が、きまりません。そこで、

青いね

□いね

と、よんで、次の、□をきゝますと、さつき、いつたばかりですから、すぐ、「海」と分りました。そこで、又一度、初から、

青いね

□いね

空は海ね

海を こいでる

三日月船ね

と、よみまして、□の字を、考へさせますと、送り假名法を知らない尋三の生徒は、

大きいね

といふのが三四人。然し、それは「□○ いね」である事を教へますと、可愛い首を右へ、左へ、皆、傾けつゞけて、

「あ、分りました。はい、はい」

と上る手の元氣よさ。

「高いね、です」

「なるほど、

青いね
高いね
空は海ね、
海を……
それも善いですが、海ですから、『高い海』といふより、もつと、海らしい空、空の海の事は、何とか、いへませんか」。
といひながら、大空を仰いで、視線を大きく左から右へ廻し片手も差し延べて、大きく弧を描いてみせて、
「大きいといはないで、大きい事を、何とか謂へませんか」
と尋ねますと、
「大きい……太い。あ、太いです」
といふものがあると、誰かゞ、
「太い海つて、をかしい」
と笑ふので、又、皆、だまつて考へ込むのでしたが、急に、一人が、
「先生々々、分りました〳〵。『廣い』です、『廣い海』です」
といふや、誰彼一緒に
「さうです〳〵、『廣い』です、『廣い海』です」
と、もう、きめてしまつて、ニコ〳〵するのでした。
「よろしい、『廣い』ですよ」。
と、□の中に、「廣」の字を、かき入れて、皆に、一緒に、よませると、
「青いね
廣いね
空は海ね
海をこいでる
三日月船ね」
と大きな聲を、そろへて、皆。ニコ〳〵、ニコ〳〵。
さて空を海と見たてゝ、青い海、廣い海は、きまりましたが、唯、青いだけ、廣いだけでは、海らしくもないので、
「何か、波らしいものは、空に、有りませんか」
と尋ね、重ねて
「何か、島らしいものは空に、有りませんか」
と尋ねて、まだ、よい決定を見かねてゐますがさて、何が、空の波になり、空の島と見えるでせう、幼兒の眼に。

その不定の中にも、三日月船は、三年生の皆に、うれしくて、さて、

「先生、三日月船には誰が、乘るんですか」

と問ふものが、ゐてくれた嬉しさ、

「さあ、誰が、乘るんでせうねえ、ほんとに——。あなた、のれますか」

と問うて見ると、すぐ、鋭ぎくも

「いゝえ」

との返事。

「先生が、のれるでせうか」

と尋ねてみると、一人

「えゝ、先生は、のれます」

といつたものが有りましたが、多くは

「いゝえ」

でした。先生が乘れるといつたのは、先生は、何でも出來ると考へてゐるからか、または多少、先生といふものに、お世辭を考へてゐる事がでせう。

「どなたか、此の中で、三日月船に、のれると思ふ方—」

と、擧手を求めましたが、一人も、手を擧げません。小さな聲で、

「飛行機にのつて三日月までいつて、乘るといゝ」

と話し合つてゐるものもありましたので、

「月までは、とても、今のところ、行けさうもないんですから—」。

さて、

□たち　のれない
○の船ね

とかいて、また□や○に、漢字一字づゝ、入れさせますと、□が、「私」か「僕」である事は、すぐ分りましたが、○は、すぐには、出ませんでしたので、初の

青いね
廣いね
空は海ね

を考へ出させて、さて、

私たち　のれない
○の船ね

を尋ねて、二三回問答の末、

私たち　のれない
空の船ね

ときまりました。そこで、續けて、
「では、誰が乘る三日月船でせう」
と尋ねてみますと、實に、いろ〳〵出ました。「鳶の子」「烏の子」といふと、輕々しくも「鳩の子」「燕の子」「……の子」などゝ知れる限りの、鳥が出て來るのです。そこでやたらの鳥ではいけないこと、鳥よりも、もつと、善いものは、と、更に、熟考を求めてみますと、うれしくも、「風船玉」や、「シャボン玉」が出て來るのでしたが、
「もつと、しつかりしたものが、乘らないでせうか。そんなに、地面から、上つて行かないで、空にばかりゐるもので、何か、美しいものが乘らないでせうか」。
と、重ねて聞きますと、又、鳥が出かけて、皆から、引込めさせられて、「雲の子」が出まして、
「さうです、『雲の子』です」

この賛成も一二ありましたが、
「もつと、はつきりした事」
と、三度目の熟考を命じて、

私たち　のれない
空の船ね
□のこごもの
三日月船ね

とかいて、□の決定を求めましたら

月の子供

といふものが出て、大笑になりました。
「月のやうに、空に有るもの。しかし、月の樣に、たつた一つでなくて多勢、一緒に、遊んでゐるもの」さ、それは、なーに」。
と、釣り出しますと、あまり多くの沈默もなくて、すぐ、

星の子供

といふ事が、分つて、皆大ニコニコ。

そこで、初から、

廣いね
青いね
空は海ね
海を　こいでる
三日月船ね

私たち　のれない
空の船ね
星の子供の
三日月船ね

と、よませて、さて、

「この童謠が、よく覺えて下さい。三日月樣は、上が缺けてるのか、下が、缺けてるのか、よく覺えていらつしやいね、下が缺けてると、三日月船にはなりませんね」

「ひつくりかへつてるんです」

「さうでせう。三日月船といふ船なんですよ。船は、のれなくては船にはなりませんね。ですから、この童謠を、よく覺えておけば、三日月は、船なんですから、上が缺けた形だといふ事が、よく分りますよ。

今日ね、お家へ歸つて、お母樣やお父樣がお忙しかつたら、お姉樣か、お兄樣か、大人の方に、きいて御らんなさい。三日月樣は、上が缺けてゐますか、下が、缺けてゐますかつて——。そして、もし、そく御存知なかつたら、この、童謠を覺えてお置きなさいといつて、皆さん、ゐばつてお上げなさい。さ、今度は、三日月船を暗誦して見ませう」

といつて、所々の、漢字を、消して、一緒に、齋誦させて見ますと、大丈夫、完全に、よめるのでした。

かくて、この童謠は、前述のとほり、波と島との描寫が、未完成のまゝになつてゐますが、それは、なくても、此のままでも幼兒間には、よい程の長さであり、また、前述の內容の點に於て、成人した後までも、「三日月船」といふ詞だけによつて、三日月の形を覺えしめて、一生に、何かの役目を果して呉れませう。（次號『幼兒の科學』）